

---

# 秋色K i s s

竹仲法順

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

秋色K i s s

### 【Nコード】

N6915C

### 【作者名】

竹仲法順

### 【あらすじ】

二〇〇七年九月。僕と詩織は都内の同じ会社で働きながら、互いの部屋に上がり込んで愛を深め合う仲だった。僕も詩織も互いに満たし合いながら、二人きりの時間をゆつくりと過ごしていた。秋が深まり十月になって、詩織は僕にある重大な事実を打ち明けるが…。気鋭の作家が書き下ろす恋愛短編！

「駿二」

「何？」

「こんな二人つきりの部屋で、キスしないなんておかしいわよね？」

「うん、まあ……」

僕が言葉尻を濁しながら頷く。

僕は高校卒業後、九州の田舎から上京して、ずっと東京のワンルームアパートで暮らしていた。就職先の会社も地元の福岡ではなく、東京の商社を選んだ。

僕の部屋に上がり込んで、目の前にいるのは、恋人の詩織だった。詩織は僕と同じ会社で働いているOLで、おまけにフロアーも一緒なので、顔を合わせることもたびたびだった。

「キスね。まあ、してもいいんじゃない」

「じゃあ、目瞑つぶってよ」

「分かった」

僕は詩織から言われた通り、目を瞑った。

すると詩織の柔らかな唇が僕のそれにそっと重なった。そのまま、二人でとろけるような甘いキスをする。

詩織は僕のことを愛おしくなったのか、僕の体を両手で抱きしめ、「今夜は離さないからね。絶対離さない」

と言つて、口付けから一気にエッチまで行った。

詩織が僕の体中にある、ありとあらゆる性感帯という性感帯を弄ってきた。僕は正直こそばゆく思いながら、されるがままにしていた。

「……」

二人でしばらく遊んでいると、詩織が、「すっかり秋ね。涼しくなっし」

と言い、僕の着ているTシャツとトランクスを取って、背中と胸部、腹部に手を滑らせ始めた。

愛撫が続いた後、僕は今度は逆に詩織の体を抱きにかかる。

「あ、あつ、あーん……」

僕に感じる部分を絶えず刺激された詩織は喘ぎ声を上げる。僕の心はだんだんと興奮し、疼き始めた。

僕は愛撫を続けた。豊かな乳房に濡れそぼった陰唇と、詩織が感じる部分にゆっくりと手を滑らせていく。

やがてお互い満足したからか、僕たちは繋がった。

僕は一度ということなく、何度も詩織を抱いているので、彼女がどうすれば悦ぶかを知っていた。

膣内でペニスが膨らみ、僕は激しく腰を振り続ける。

詩織も応じるように腰を動かし、セックスに精を出す。

正上位から入って、騎乗位で詩織が僕の上に跨り、腰を前後左右に動かす。

ゆっくりとした性交が二十分ほど続いた。

そして僕は詩織の膣内で果てた。精を吐き終わったペニスは、ゆっくりと収斂していく。

僕はその夜、性交が終わった後、部屋のベランダから星を見上げていた。カシオペアやペルセウスなどの秋の星座がたくさん見える。僕は詩織と寄り添いながら、空を見上げて、瞬く星空をじっと見つめていた。

星を見飽きると、僕たちはシングルベッドで寄り添い眠った。

時間だけがゆっくりと過ぎ去っていく。

そして一夜が明けた。

\*

その日はウィークデーだったので、僕も詩織も出勤日だった。

二人とも朝早起きし、詩織が先に洗面台で洗顔をした。僕は後から顔を洗い、伸びきった髭を剃る。

詩織が部屋に一枚だけある鏡で、メイクをし始めた。秋物のフア

ンデを散らし、唇に薄い赤色のリップスティックを塗る。

何度か重ね塗りした後、指でツンツンと突いて整えた。

髭を剃り終えた僕は、ボサボサの髪の毛にヘアワックスを付けて整髪する。詩織は女性用のヘアジェルを付けて、髪の毛をふんわりとアップさせた。

僕たちは出社準備が整うと、一緒に部屋を出た。

ボロのアパートの一室から男女が出るのを目撃できる人間はいっぱいいる。でも今朝だけはなぜか、誰にも見られなかった。

僕は鍵を閉めると、ゆっくりと歩き出した。詩織も並んで歩く。歩いていると、なぜか腕を組みたくなった。僕は自分から意識して腕を組もうとする。すると詩織が差し出された腕を組み返した。

僕は詩織の体の発する熱や、軽めに振った香水の匂い、そして何より込み上げる愛おしさを感じ取った。

「コーヒー、飲まない？」

僕が詩織にそう訊ねると、詩織が、

「いいわよ。まだ時間あるし」

と言い、早朝の新宿区内を練り歩く。

やがて十分ほど歩き、ビルが林立する都心に着くと、詩織が馴染みのコーヒーショップを見つけて指差した。

「あのコーヒー屋さんがいいの」

「そう」

僕たち二人はゆっくりとその店へ向かう。

出入り口のドアを押し開けて店内に入ると、中には軽妙なジャズが掛かっていて、寛げそうな空間があった。

「マスター、おはよう」

「ああ、詩織ちゃんか」

どうやら店のマスターと詩織は顔馴染みのようだった。

「そっちのお兄さんは？」

マスターが詩織に問うと、詩織が、

「ああ。この人はね、あたしの彼氏」

と言い、軽く笑った。

「初めまして。河村駿二と申します」

僕が折り目正しく挨拶すると、マスターが言葉を返した。

「ああ。私、この店の店長の亀井です」

中年のマスターはどうやら亀井という名前らしい。

「まあ、座って座って」

マスターが促すと、僕と詩織がカウンター席に並んで座った。

「マスター」

「ん？」

「コーヒー二杯。それと、この人にモーニングを一人前用意してあげて」

「分かりました」

マスターは一転改まった口調になり、モーニングを用意し始めた。

しばらくして、ガムシロップとミルクが添えられたホットコーヒ

ーが二杯と、モーニングが一人分、カウンター越しに運ばれた。

僕は予めバターを塗って焼かれたトーストを指で割いて口に入れる。

「野菜サラダだけでもいい？」

「ああ」

「じゃあ、もらうわね」

詩織がそう言い、野菜サラダの載った皿を自分の方に引き寄せ、フォークで突き出した。

どうやら詩織は朝早い時間帯は、こういったコーヒーと軽食が、全く何も食べないで会社に来ているらしい。

「美味しいわね」

詩織は千切りにされたニンジンに、キュウリとトマト、玉ねぎがドレッシングで和えられたサラダを食べながら、時折コーヒーを飲む。

僕たちは自分たち以外誰もいない店内で三十分ほど食事して、レジで掛かった料金を清算してもらい、店外へと出た。

オフィスに向けてゆつくりと歩き出す。店から会社までは距離にして二百メートルぐらいで、余裕で間に合う。

僕は再び、詩織と並んで歩き出した。

街はすっかり秋めき、皆長袖だった。時折半袖シャツの人も見かけるが、季節が移り変わりつつあるせいか、長袖シャツに背広を着た人が圧倒して多かった。

僕たち二人はオフィスのあるビルへと入っていった。

\*

「お前ら出来てんのか？」

オフィスのあるフロアーに二人で並んで入った瞬間、部長の島田が言ってきた。

「別にそんなんじゃないですよ。単に出社するとき、一緒になっただけで」

僕が弁解すると、島田が、

「中谷さん。昨日と服同じ」

と詩織に言って、笑った。どうやらお泊りデートがバレたらしい。察しのいい島田が言葉を重ねる。

「こいつ、結構恋愛には奥手なんだよ。しっかりリードしてやってくれよ」

「……」

無言のまま詩織が頷くと、島田が、

「じゃあ、仕事仕事」

と言い、出社していた部下たちにテキパキと指示を出し始める。

僕は自分のデスクに座ると、パソコンを立ち上げメールボックスを開いて、新着メールをチェックし出した。

必要なメールに目を通し、他は迷惑メールフォルダーに入れる。

それが終わると、

「じゃあ、今から外回りしてきます」

と言い、カバンを持ってフロアーを出た。僕は会社では営業担当で、バリバリの現役営業マンなのだ。

詩織は秘書課に所属していて、丸一日パソコンの画面を見つめながら、必要な書類などを作っている。

詩織が、僕が出ていったのを目で確認すると、パソコンのディスプレイに目を戻す。

「詩織」

「何？」

「あなた、いつから気になり出したの？」

「何を？」

「河村君のことよ」

詩織に話しかけてきたのは、同じ秘書課に所属する倉本真紀だった。

\*

「真紀、何か誤解してる」

「誤解？」

「うん。あたしにとって河村君は単なる男友達よ」

「エッチした？」

「どうしてそんなこと詮索するの？」

「だって、気になるじゃん。自分の会社の同僚の女の子の恋模様って」

真紀はそう言い、言った後、溜め息をつきながら、

「あたしも彼氏欲しいなあー」

と言って、サボっているのが上司にバレないように、ゴホンと一ツ咳払いをし、

「ちょっとトイレ行ってくるね」

化粧ポーチを利き手である右手で持って、フロアーを出ていく。

“……”

しばらくの間、詩織は何を思うことも出来ず、仕事が全く手に付かなかった。

そして次の瞬間、思った。

“これが愛する人を想う気持ちなんだわ”

詩織は手元に立ち上げているパソコンからではなく、持っていた携帯から僕のアドレス宛にメールを送信した。

> また会って満たしあいたい。今夜とかどう？<  
 たった一行ちよつとのメールだったが、効果があったらしく、すぐにレスが返ってきた。

> ああ、分かった。午後七時に社のエントランスで待つてる<  
 詩織はそれを読んだ後、安堵したらしく、溜まっていた胸苦しさを取り除くように大きく息をつき、軽く一つ伸びをした。

そして二時間後に、真紀ではなく、秘書課のもう一人の同僚で、大の親友の高岡未知とランチに出かけた。

詩織の中のモヤモヤはもはやなくなつた。颯爽と社のフロアを歩き、通りすぎる会社の人間たちに「お疲れ様ー」と声を掛けていく。

「テンション高いわね」

「うん。吹っ切れちゃった」

未知の言葉に、詩織が返す。

二人は歩きながら、他愛のないお喋りを始めた。

そのときの詩織は、心の中で今夜の僕との出会いを楽しみにしながら、ゆっくりと歩いていく。

\*

「待った？」

僕が約束場所に遅れてきて、詩織にそう問うと、詩織が、

「いや。今来たところ。トイレで化粧直しまでしてきた」と言った。

「秘書課っていいよな。定時に仕事が終わるし。営業部は大変だよ。残業までさせられるしな」

僕がそう言つて、

「行こう」

といい、詩織を近くの飲み屋に連れていった。時間が時間とあつてか、店内は混雑していた。

僕たちはカウンター席に座り、ビールで乾杯して、かなりたくさん酒を飲んだ。

午後十一時。

終電はあったが、今夜の僕たちはこのまま別れられそうにない。今度は僕が詩織の部屋に泊まり込み、一夜を共にする気でいた。

「部屋、上がっていいだろ？」

「うん。掃除とかしてないから汚いけど、いいわよ」

「じゃあ秋だから、焼酎でも飲みながら月見でもするか？」

「いいわね」

詩織が頷き、荻窪方面の丸の内線のホームへと向かった。僕が後に続く。

僕たちは手を繋いだまま、コンコースに降り立った。

すでにビールと日本酒で相当酔っているのに、僕は新宿近辺にある二十四時間営業の酒のディスカウントストアで焼酎を一本買い込んでいた。

「……… 今晚はいい夜になると思うよ」

僕がそう呟くと、詩織が黙って頷く。

電車のドアが閉まり、ゆっくりと東京の西に向けて走り出した。

僕は詩織と一緒に、電車内の宙吊り広告を見るともなしに見ていた。

やがて電車が駅に着き、僕たちは降りた。慌てることなく、ゆっくりと歩を進める。

月はネオンと灰色の雲に隠れて見え辛かったが、僕も詩織もあまり気に留めてはいなかった。

詩織は部屋に着くと、開錠し、

「どうぞ」

と言って、僕を入れた。

「お邪魔します」

僕がそう言って、詩織の部屋へと入っていった。

室内にはハーブ系のいい香りがする香水が置いてあるようで、そ

の匂いが仄かに漂っていた。

僕は部屋に上がると、

「窓開けて、ベランダから月を見ようよ」

と言い、ガラス戸を開け放ってベランダに出た。もちろん、買っていた焼酎を手に持って、だ。

艶やかな月が仄見える。今夜は満月だった。

僕が焼酎の栓を捻って開け、半分ラツパ飲みながら月を見る。

傍では、詩織が缶入りのカクテルを飲んでいた。

ゆっくりとした時間が流れていく。そう、誰にも邪魔されない二人だけのときが訪れているのだ。

僕は不意に詩織を抱き寄せ、自分の唇を詩織のそれに重ね合わせ、口付けた。

「……」

しばらくまるで時間が止まったかのように、僕たちは唇と唇を重ね合わせて、無我夢中でキスをし、互いの心に込み上げる愛を確かめ合った。

「すっかり秋ね」

「ああ。キスも夏みたいに情熱的じゃなくて、しっとりした秋色だな」

僕たちはそう言い交わしながら額と額を合わせ、愛を確かめ終えると体を離し、再び外の景色を眺め始めた。

室外からは虫の鳴く音が聞こえてくる。

僕たちはどちらからともなく着ていた服を脱ぎ、交わり始めた。

抱き合うことには互いに慣れているつもりだったが、その夜はいつもより更に深く愛を満たし合いながら、ゆっくりと性交した。

その夜。

僕たちは性欲を満たした後、一緒に風呂に入り、体を洗い合った。そしてゆっくりとした眠りに就く。

\*

明け方になり、僕は先に目覚めた。隣を見ると、詩織はまだ眠っ

ている。

僕は詩織の頬に一つキスをすると、起き出し、部屋着から昨日着ていたスーツに着替えた。今日はここから出勤する気でした。

今日は金曜なので、明日からは休みだ。僕は慌てずに、ゆっくりと構えていた。

やがて詩織も起きてくる。

僕が、

「おはよう」

と挨拶すると、詩織が目を擦りながら、

「早いのね」

と言い、下着姿で部屋の中をウロウロし始める。

僕が、

「何か着たらどう？」

と言つと、詩織が、

「そうね」

と言い、クローゼットから会社の制服を取り出して着替え始めた。急に冷え込み始めた。まるで冬が近いかのように、今朝の東京は

寒かった。

身支度を整えた僕が、

「キッチン借りるね」

と言い、詩織が頷くと、薬缶に水を入れて沸かし始めた。

朝一の温かいモーニングコーヒーは体にも心にもいい。僕は詩織の分までコーヒーを淹れるつもりでいた。

しばらくして、着替え終わった詩織が僕の淹れたコーヒー茶碗を受け取ると、囁り始めた。

ズウー……。

二人で熱いコーヒーを飲みながら、朝の時間をゆっくりと過ごす。

「さっきのキスが切なかった。オレンジ色の秋空みたいに」

「……」

詩織は眠っていないながらも、僕が頬にしたキスの感覚に気付いてい

ただ。

僕たちはコーヒを啜り終わると、どちらからともなく抱き合った。軽く抱擁し合ったからか、僕と詩織の体の匂いが同じになる。

その日。

僕は詩織の部屋から揃って出勤した。

並んで歩く姿はすっかり様になっていた。

僕は詩織の手の温かさを感じながら、ゆっくりとオフィスに向かった。

詩織も僕の手の温もりを感じ取りながら歩いているようで、時々恥ずかしそうな顔をする。

しかし僕たちは幾分恥ずかしさはあるものの、もう迷わなかった。二人で堂々とオフィスに入っていく。

出勤してから仕事が終わって会える時間まで、僕は胸苦しさと切なさ、それに何より込み上げる愛おしさを我慢しきれずにいた。そう、詩織のことを想うたびに……。

詩織も同じ気持ちらしく、勤務時間中にも携帯に何度もメールが来る。

僕は詩織の送ってきたメールに、こまめに返信するのというのを繰り返した。

それから二週間ぐらい、僕たちは体を重ね合わせ続けた。

十月に入り、半袖シャツが長袖のそれに切り替わった頃、詩織が僕にあることを打ち明ける。

\*

「妊娠してるの。着床したばかりだって」

「俺の子供なのか？」

「ええ。紛れもなくあなたの子供よ」

「そうか……」

僕は何と思っているのか分からなかった。ただ確実なのは、詩織のお腹の中に僕の血が流れた新しい命が宿っているということだ。僕が思わず、

「産むのか？」

と問うと、詩織が、

「ええ。愛おしいあなたとあたしの子供だから。産むつもり」

と言い、思わずはにかんでみせた。

僕は詩織をそっと抱き寄せた。そして詩織のお腹を擦り、中にあ  
る新しい命の芽吹きを喜び合った。

僕がそれから仕事に精を出し、詩織は産休を取るまで働き続けた。  
時は一時も止まることなく、容赦なしに流れた。

\*

翌年の八月中旬。

詩織は元気な男の子を産んだ。

僕は生まれたままの保育器に入っている赤ん坊を見ながら、出産  
直後でベッドに横たわっている詩織に、

「名前、何て付けようか？」

と訊いた。

「じゃあ駿二の駿の字と、あたしの名前から一文字ずつ取って、詩  
駿ゆんって付けよう」

「詩駿か。いい名前だね」

僕たちはそう言い合って、再び笑顔を見せた。

僕たちの愛の結晶である詩駿は、健やかに育っていった。

僕たちの愛も、詩駿の健やかさと同じように、日々深まっていく。

二〇〇八年の夏も前年と同じぐらい暑かった。

空には青いスクリーンに、白い雲が棚引き、真夏に太陽の光を浴  
びて生長する緑はその深みを余すところなく見せた。

なぜか無性に海に行きたくなる季節が来ている。

(了)

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6915c/>

---

秋色 K i s s

2009年6月27日05時20分発行